

研究機関名：東北大学

受付番号：	2012-i-368
研究課題名	胆道閉鎖症の肝移植に関する後方視的検討
研究期間	西暦 2012年 11月（倫理委員会承認後）～ 2013年 6月
対象材料	<input type="checkbox"/> 病理材料（対象臓器名： ） <input type="checkbox"/> 生検材料（対象臓器名 ） <input type="checkbox"/> 血液材料 <input type="checkbox"/> 遊離細胞 <input checked="" type="checkbox"/> その他（診療録、レントゲン写真 ） 上記材料の採取期間 西暦 1950年 1月～ 2012年 10月
意義、目的	<p>胆道閉鎖症は新生児期、乳児期早期に発症する難治性の胆汁うっ滞性疾患である。治療にはまず肝門部空腸吻合術を行うことが一般的であるが、日本胆道閉鎖症研究会の全国登録によると本手術により黄疸が消失する割合は6割程度である。このときに黄疸消失を得た症例も、その後に胆管炎や門脈圧亢進症といった続発症の発症により治療を継続して必要となる。そして結果として肝病態の悪化からある程度の時間を経過してから肝移植を要する症例も少なくない。事実全国登録のデータから1年自己肝生存率は8割であるが、15年自己肝生存率は5割程度であり、15年で3割の患者が肝移植の適応となっている。</p> <p>ただし臨床の現場では最初から黄疸が消失せずに肝移植に至る症例と年長児や成人で肝移植を要する症例では、その経過や病態に大きな差異が認められる。しかしこれに関するまとまった報告はこれまで見当たらない。</p> <p>当科は肝門部空腸吻合術を開発した施設であり、年長の症例を数多く管理してきた。よって、今回は年長の症例において肝移植をようする患者を集積し、その病態を解析することを目的とする。</p>
方法	<p>対象症例を肝移植を実施した年齢に応じて group 1：2歳未満、group 2：2歳から9歳、group 3：10歳から19歳、group 4：20歳以上の4群に分類し、各群間で比較検討を行う。</p> <p>検討項目としては、葛西手術後の黄疸消失の有無、肝移植に至る臨床経過、移植適応理由、肝移植施行時の肝機能、肝移植術後経過とする。</p> <p>対象症例において診療録を後方視的に参照して検討を行う。</p>
問い合わせ・苦情等の窓口	東北大学病院 小児外科 佐々木英之 980-8574 仙台市青葉区星陵町1-1 電話 022-717-7237